



開拓当時を伝える

エドウィン・ダン記念公園(札幌市)

森林インストラクター
小沢 信行 (おざわ のぶゆき)

十勝管内足寄町出身。1978年北海道新聞社に入社。記者として函館、釧路、小樽などで勤務。編集委員、論説委員などを務め2017年退職。日本森林インストラクター協会会員。道新文化センターで樹木観察の講師を務める。著書に「こうしてできた北の銅像」。

住宅地が広がる札幌市南区真駒内は、かつて開拓使の牧牛場でした。指導者の功績をたたえるため、名前を冠したエドウィン・ダン記念公園（真駒内泉町1丁目）には銅像を建設、牧牛場の旧事務所を移築し記念館として公開しています。また、通路沿いには^{ぼくさく}牧柵を設け、開拓当時の雰囲気を再現しています。



公開されているエドウィン・ダン記念館

レリーフになった日本人妻

米国人エドウィン・ダンの銅像は公園の中央に立っています。作業着姿で右肩に牧草用のフォーク、左肩には子羊を抱えています。ユニークなのは銅像本体が正装でないのに加え、台座に装飾が施されていることです。

牧場の作業風景がレリーフで表現され、6面に分けて外周にはめ込まれています。その中の一つに、牧柵に寄りかかる女性が描かれています。下には小さな字で「ダンの家とおつるさん」と記されています。

制作者の^{みなたかし}峯孝は「レリーフの一隅に^{のらぎ}野良着姿の女性を入れたのは、ダンさんが日本に残られた誘因の一つと思われる夫人おつるさんの面影を、という気持ちがあったからです」と完成記念のしおりで説明しています。

ダンの人生に強い影響を与えた日本人妻ツルは1860年、青森県で生まれました。1875年、道南の七重官園^{ななえ かんえん}で働いていたダンと知り合い、その後ダンの女中として行動をとものにします。

ダンは結婚を希望していましたが、国際結婚が簡単に認められる時代ではありませんでした。1876年に札幌に移り住み、翌年長女ヘレンが誕生。面倒な手続きを経てようやく結婚が認められたのは、上京後の1884年です。

この年、ダンは駐日米国公使館2等書記官の職を得、ツルは東京舞踏倶楽部の会員となり、社交界にデビューします。「東京の貴婦人たちと私の妻とが親しい間柄になったお陰で、私は日本の上層階級の社交生活の中に足場を作ることができた」^{たかくらしんいちろう}（高倉新一郎編「エドウィン・ダン 日本における半世紀の回想」）とダンは感謝しています。



公園を象徴するダンの銅像

その一方で、ツルはつらい体験もします。娘と2人で街を歩いていると、子どもたちが大声で悪態をつきながら追いかけてきました。母は娘を抱きしめ泣くばかり。そこへ巡査がきて追いかけてくれましたが、その話を聞いたダンには悔しい思いを強くします。

そんな折、ダンは5歳の娘を連れ米国へ一時帰国しました。将来、家族で住む新天地を探す予定でしたが、適当な土地を見つけることができません。滞在した半年間に娘は実家の生活に慣れ、英語をすらすらしゃべるようになっていました。結局、娘の人生を考え、一人で日本へ戻ったのです。

わが子と離れ離れになったツルは、娘へあてた手紙に「あなたのいないのが淋しくて少しも心が晴れません。アメリカにいる方があなたのためにはずっと良いということが、いつかわかってもらえると思います」（ヘレン・ダン・スミス「あるお雇い外国人の生涯」）と書いています。母親の切ない心情が伝わってきます。



台座に描かれているダンの妻ツル

しかし、娘との再会は果たせませんでした。ツルは1888年、慢性胃炎のため28歳の若さで亡くなります。レリーフに描かれた牧場のツルに待ち受けていたのは、華やかでありながらも、喪失感が癒えない東京暮らしでした。

地域を潤す用水路

春はキショウブ、夏はスイレンが咲き、人々の目を楽しませる「ひょうたん池」。ここから流れ下る水は戦前まで、農業用水として広い地域を潤してきました。



春にはキショウブが咲くひょうたん池

牧牛場の開発当時、近くに川はなく、牛に水を飲ませるには井戸水をくみ上げるか、遠くの川まで牛を連れて行かなければなりませんでした。効率よく水を確保するため、ダンは用水路の建設を開拓使に提言します。

その結果、1879年には真駒内川から取水し、牧場内を通り、精進川に注ぐ全長約4^キの用水路が完成しました。これにより、飲み水の供給ばかりでなく、肥料となるニシン粕、油粕の製造や乳製品の加工ができるようになりました。

一方、北海道内で切実だったのが主食となるコメの確保です。道内産は需要の1割にも満たず、生産拡大が急務でした。そこで北海道庁が1893年、用水路のある真駒内を稲作試作場に選定します。

さらに、1894年には精進川から平岸、白石方面にも用水路を延長し、真駒内川の水を供給したことで水田の作付面積が急増しました。

戦後、都市化に伴い農地が減少し、平岸、白石方面への用水路は埋め立てられましたが、真駒内用水路は

役目を終えた今も残っています。エドウィン・ダン記念公園から緑町公園、曙公園へと流れ、人々の心を潤す親水機能を果たしています。

日米親善のハナミズキ

芝生地の北側にある3本のハナミズキは秋になると、艶のある赤い実を付けます。

北米原産でミズキの仲間です。東京市が1912年、ワシントンにサクラの苗木3,000本を贈ったお礼に1915年、ワシントンからハナミズキの苗木40本が東京市に寄贈されました。それが日本に移入された始まりだとされています。

日本に自生するヤマボウシと花が似ており、別名アメリカヤマボウシとも言います。いずれも葉が変化した花弁状の白い総苞片が4枚あり、その中心部に小さな花が集まっています。ヤマボウシは総苞片の先がとがっているのに対し、ハナミズキはくぼんでいます。

ヤマボウシは丸いイチゴ状の赤い実を付けますが、ハナミズキは楕円状の赤い実がなります。花芽がタマネギ形なのもハナミズキの特徴です。



真駒内の住宅街を流れる用水路



赤い実を付けたハナミズキ

花も実を楽しめることから、札幌でも中島公園や豊平公園などに植えられているものの、花の付きはあまりよくありません。冬の寒さが災いしているのでしょうか。

「日米親善の木」とされてきたハナミズキ。花言葉は「返礼」です。米国人功労者を顕彰するこの公園にはうってつけの樹木です。

映えるハウチワカエデ

秋の公園を彩るのはハウチワカエデです。国道脇の入り口を入ると円形の花壇があり、園路を挟んで外側の緑地帯に花壇を取り囲むように植えられています。

ハウチワカエデは葉が手のひら状に広がり、先が7～11に裂けています。その形が天狗の羽団扇はうちわに似ていることが名前の由来です。5月になると、小さな赤い花を下向きに咲かせます。新緑の中、鮮烈な色に目を引かれますが、美しさを大胆に演出するのは秋になってからです。

緑だった葉は秋が深まるにつれ、黄色味を帯び、さらに赤く染まり始めます。この3色が絵具をにじませたように引き立てあい、最後には樹木全体が赤色に燃え上がります。カエデの中でも紅葉が最も美しい品種の一つです。

10月下旬、この一画に足を運ぶと、ハウチワカエデだけをまとめて植えた訳がよくわかります。ただ、紅葉は日照時間や寒暖差などの気象条件に左右され、毎年同じような色合いを見せてはくれません。今年どうなるかは、お天気次第です。



10月には紅葉するハウチワカエデ

名物のオンコザクラ

記念館の庭に「オンコザクラ」と呼ばれる木があります。イチイ（オンコ）の幹の途中からエゾヤマサクラが生えており、春には立派な花を咲かせ公園の名物となっています。

このイチイは1.5^キ北にあった旧事務所の玄関正面に植栽されていたもので、旧事務所が記念館としてこの地に移築された際、一緒に移植されました。樹齢は推定180年。もう1本あったイチイは道庁正面玄関前に植えられています。

イチイが移植されたのは60年前の1964年。その後、幹と枝の分かれ目にあったくぼみに鳥が糞みんを落とし、その中であつたサクラの種が芽を出したのでしょうか。

くぼみが深く根を張るのに適した環境だったため、サクラはどんどん成長し、今ではイチイの背丈をはるかに超えています。幹も太くなり、イチイが張り裂けそうな勢いです。枝の一部は枯れてしまいました。

常緑樹と落葉樹が合体し見た目にはおもしろい光景ですが、内実はサクラの攻勢にイチイが苦戦を強いられているのです。



イチイとサクラが一体のオンコザク